

薬剤師の役割変化の自覚と生涯研修の方向性

内山 充

最近における急激な医療環境と患者ニーズの変化によって、薬剤師の社会的役割が大きく変化したことは、今や薬剤師の誰もが自覚しています。長年にわたる悲願であった医薬分業は著しく促進され、教育改革は実現し、さらに法規の改正等により薬剤師の職責や位置づけも大きく変化しました。残すところは、薬剤師自身の努力による職能（専門職としての能力と機能）向上であり、そのための生涯研修への取り組みです。

薬剤師の生涯研修への取り組み方については、欧米各国でも真剣に検討されています。別表の「薬剤師生涯学習-国際コンファレンス」からも明らかなように、生涯研修を、単なる「継続教育 CE」から「継続的職能向上 CPD」に展開する道筋について、第2回以来引き続き主テーマとして取り上げられています。

薬剤師の生涯研修のパラダイムが、CE から CPD に移っていることは、先に本コラムでも触れました【CPD とは：コラム履歴 2005】。しかし、単に CD とか CPD とかいても、概念として明瞭には理解できないところがあるかもしれません。各国でも、さらに各個人でも CPD は多様に解釈され、導入法もまちまちのようです。

CPD は、passive（受動的）研修から re-active（反応的）研修へ、そして pro-active（先見的）研修への変換です。そして、研修を決して目的とは考えず、成果を得よう心がける、すなわち、研修を受けたことに満足せず、何が得られたかを自覚する成果志向性が重要といえます。また、教育側主体でなく受講者主体の自己管理方式であり、実務の場からの発想に基づく企画が望ましい研修です。

わが国でも最近の傾向として、生涯研修に対する薬剤師の取り組み方に自主性がはっきりしてきたと感じられます。将来計画を念頭に置いた自己査定に基づき研修課題を選択し、さらに特定の関心のある領域での職能を深めようとする傾向が見られ、それが職域拡大への努力にも繋がるものと思われます。

わが国の薬剤師の生涯研修の目標は、今や「患者主体の安全・的確な医療の担い手として、患者をはじめ世の中の人々、ならびに医師をはじめとする医療従事者の信頼と共感が得られる業務ができる職能向上」となっていますから、CPD への方向性を正しく歩んでいくといっても良いでしょう。

なお、生涯研修の目的は、あくまでも職能向上・職域拡充によって、患者のために役立つ業務改善を成し遂げることにあるのであって、決して資格の取得やメリット追及が第一義ではないことを忘れないください。（2008.9.29）

CPD についての FIP(2002)での定義は「個々の薬剤師が、専門職としての能力・適性を常に確保するために、生涯を通じて知識、技術、心構えを、計画的に維持、発展、拡充するという責任行為」となっています。

薬剤師生涯学習-国際コンファレンス(Int. Conf. on Lifelong Learning in Pharmacy)開催地とメインテーマ

- 第 1 回 1990. 5. 10~12 デンマーク, Hillerod
- 第 2 回 1994. 8. 22~26 アメリカ, Wisconsin 大学, Madison
 - ▶Critical Issues in the Delivery of CPD
- 第 3 回 1998. 6.10~13 デンマーク, Hillerod
 - ▶Improved Outcomes through Better Design and Delivery
- 第 4 回 2000. 6. 7~9 北アイルランド, Templepatrick
 - ▶LLL-The Route to CPD
- 第 5 回 2002.6.24~27 南アフリカ, Rhodes 大学, Grahamstown
 - ▶CPD: The Road Less Traveled
- 第 6 回 2005. 6.26~29 カナダ, Saskatoon
 - ▶Practice, Academia & Industry: Building Bridges through CPD
- 第 7 回 2007. 6. 1~4 イギリス, Hertfordshire 大学, Hatfield
 - ▶Climate Changes in Learning